

〃 二十三年四月 鳥取県米子市役所奉職

〃 五十八年二月 退職

〃 六十二年五月 米子市公民館長就任、現

在に至る

(鳥取県 井上 万吉男)

## 飢餓と望郷の五九年

岡山県 木下 美知夫

武装解除、捕虜となる

ハルピンはソ連軍の入城前に非武装都市を宣言していたので、市内で戦闘は行われなかった。

終戦の四、五日後の八月二十日前後にハルピン飛行場でソ連軍による武装解除を受けた。将校の軍刀は佩用を許されたが、他の武器は総て取り上げられた。私達は小銃もなく、帯剣を取り外して終わりである。広い飛行場には一機の飛行機もなかった。

武装解除後いったん阿城兵営へ帰った。無論ソ連警

備兵がマンドリン(自動小銃のこと)を肩に掛け腕で抱えて前後左右に付いての帰営だった。現地人が荒らしたと見え兵舎内は大変であった。それでも被服類は新しい物と取り替え、持てるだけ背負袋や雑囊へ詰め込んだ。さらば阿城よ、再び相まみえむ。

一日、二日おいて阿城の東香坊駅まで徒歩行軍し、そこで無蓋貨車へ乗せられて横道河子まで輸送された。横道河子で下車させられたが、これはソ連軍の侵攻がこの地まで戦闘状態で行われたので、ここまでは牡丹江方面からソ連軍が列車の軌道(レール)を広軌に拡張していたので、私達の乗った満鉄列車は走れないためである。

横道河子から海林の燃料廠跡までは徒歩行軍だった。この行軍中には、敗軍の惨めさと哀れさをまざまざと教えられた。一般邦人のほとんどは開拓団の人達だが、軍の庇護はなくなり、終戦直後に行われた関東軍の補強のために中核たる壮年者の応召によって労働力と指導者を失い、老幼婦女の集団が途方に暮れて北から南へ、西から東へと移動をする様は誠に悲惨で言

葉に尽くせない。また牡丹江街道を西へ東へとほとほと歩く老婆の姿、西へ行けばハルビン、東へ行けば牡丹江、そのどちらが生に繋がる道かは誰にも判らない。ただ当てもなく歩く。それも、この老婆は一団の足手まといとして捨てられたのかも知れない。いや、むしろそのために自ら集団を離れたのかも知れない。幼児が道端へ置き捨てられていても、私達に自由はなく助けることもできない。その辛さ、もどかしさ。

通信線が延びて来ている。ある一カ所で電線が見えなくなっている。そこへ兵士が倒れている。勝ち戦であれば名誉の戦死であるが、その亡きがらに土を覆うてやることもできない虜囚の悲しさ。真夏の戦場、巻脚絆がはち切れるほど腫れているその間から蛆虫が多数這い出している。どうしようもない無力さを泣いた。思い出せば今なお眼が潤む。

すまじきものは戦、総ての日本人はこのことを改めて覚悟すべきである。

私達は海林の広大な燃料廠跡へ集結させられた。一カ月有余をここで過ごしたのである。

阿城で飽食していた故か、皆空腹に悩まされた。この頃私の身近で起居していた人の中に、清水正光（都窪郡常盤村、現総社市出身）さんがいた。この人は私より兵役は一年古く二年兵で、初年兵時に肺浸潤を病み阿城陸軍病院へ入院していたが、病院の閉鎖に伴い原隊復帰となり、阿城留守隊として武装解除後から行動を共にしていた。

海林集結中は非常に元気であり、また男気も十分で、私は兄貴分として寝食を共にしていた。海林收容所でも糧秣が十分支給されず、一食分が飯盒七分目量の、それも粥であった。分配して食べるのが普通であるが、清水さんは「分配せんでもええ、一緒にスプーンを突っ込んで食べよう」と言う。初めは気持ち悪かったが、馴れると何とも感じなくなり、その後はずっと続け、彼と別れる日まで一つ飯盒の飯を食ったものだ。

鉄条網を張り巡らし、その四隅に望楼を建て、昼夜を分かつぎ監視する收容所であったが、折しも九月下旬は満州の実りの秋。警備兵の目を盗み柵外へ出て、

大豆、とうもろこしを畑から盗み帰り、今日の戦果は大勝利だと、焼いたり煮たりして空腹の足しにした。

海林収容所へは十万人以上の日本兵が集められたと思う。

ここで偶然、中隊の伊藤伝三（浅口郡神島村、現笠岡市）君に出会い、奇遇を喜び合った。彼は東満虎頭南方で、ウスリー江を隔ててソ連領に面する最前線の監視哨、私達は古兵から紅葉山衛兵と聞いていた。彼はその監視哨からソ連軍の侵攻を避けて命からがらで海林まで落ちて来ていたのだ。同行五人ぐらいであったと思うが定かでない。伊藤君は同年兵である。

ここで私達の警備、護送に当たったソ連兵のことに ついて、思い出すままに記しておく。

多民族国家であるソビエト連邦共和国（これは現在、連合を解体し民主国家を目指してロシア共和国と なっている）であるから、兵士の出身部族も種々雑多、十指に余る数であると思われる。スラブ系、モンゴル系、コーカサス系等は比較的私達にとっても判別

できやすい民族であるが、色が白いからスラブ族とは決められない。混血もいるし、背の高い者、背の低い者、色の白い者、褐色の者、黒いのもいるといった具合。彼等は概して教育程度が低く、学力というか知能の点については劣っていると感じた。私達が最初に覚えたロシア語はおそらく「ダバイ」であつたらうと思う。武装解除を受けた時、初めてソ連兵を見た。もうその時は「ダバイ」を覚えたと言つても過言ではない。それは言葉が短いから覚えやすいのではない。顔を見ると同時に覚えざるを得ない動作を伴うからである。顔が合った瞬間に「ダバイ」、それと同時にこちらの持ち物があちらの手に移っていた、ということである。既に気づかれたと思うが、「ダバイ」とは「よこせ」あるいは「出せ」という意味である。否やもノーもない強引な略奪である。

早くから狙われ、一番多く取り上げられた物は腕時計であった。日本兵で腕時計を持たない者は一人もない。それも外見、一番見やすい手首に巻いているのだから、何のことはない、取り上げてくれと言つてい

るようなもの。

このことに早く気づいた者は、腕から外して物入れ等に隠し持ったのだ。しかし、それでも駄目だった。シベリアへ入ってからは作業に出るようになったが、その不在中に内務検査という所持品検査がしばしば行なわれた。逃亡を防ぐということもあつたであろうか、あらゆる貴重品、日記、メモ類は総て没収された。運よく没収を免れた者も、ひもじさのあまりパン等の食糧と交換したことなどから、復員時に腕時計を所持して帰ることができた者は、在ソ中に余程特別の仕事をしてきた者以外には考えられない。むしろ不思議と思うほどである。ソ連兵の知能というか教育の程度というのかは、我々からダバイした磁石と時計の判別がなかなかつかないことを見ても判る。

しかし、彼等の射撃がうまいことには感心した。走行中のトラックの上から野原を跳ねる野兎を簡単に仕留めて、車を停めさせて「獲物を拾ってこい」ということは、入ソ後に度々経験している。

我々は満州の北東部の各地から收容されて来る兵士

達を海林で待ち、次々と千人単位の部隊に編成された。

八月の中旬から十月の下旬まで海林にいたが、その頃から逐次「ダモイ（帰る）」と言われて列車に乗せられた。

私の大隊も十月中旬「トウキョウ、ダモイ」と言われて列車に乗せられ海林を出発した。牡丹江で降ろされしばらく牡丹江通信隊兵舎へ入れられた。牡丹江へは一週間か十日余り留まっていたように思う。

ソ連革命記念日を祝う爆竹がボンボン盛んに打ち上げられている日、牡丹江駅を「ヤボンスキー、トウキョウダモイ」と教えられて半信半疑ながら輸送列車へ、それでも喜びながら乗った。

有蓋列車ではあるが、中を二段に仕切って、座れば頭がつかえる状態であった。貨車の中に鉄板製のペーチカが一個あつた。傍の者は暑くてたまらない。離れている者は寒くてたまらない。それでも「ダモイ」が効いてか、文句や苦情もあまり出なかった。

列車は一路東へ向かって走った。ソ満国境の街、綏

芬河を過ぎて沿海州へ入った。シベリア鉄道ニコリスクを右に回って南へ向かえば、待望のウラジオストク港（当時、ナホトカ港があることは知らなかった）である。日本へ帰る船が待っていることを夢に描いて、戦友同士、期待に胸弾ませて話し合ったものだ。が、夜が明けて見たら太陽が進行方向右に見える。

「おかしいぞ、列車は北へ向いて走っているぞ」と誰かが言った。「ロシア人に騙されたんだ」と言う者がいる。幾ら騒いでもお互いには判らない。尋ねようにも貨車同士の通路はない。ソ連兵は別の貨車にいる。仮にソ連兵がいても言葉が通じない。誰かが言う。

「黒龍江河口の尼港（ニコライエフスク）から乗船するのではないか」。また言う。「ウラジオは帰還船が混んでいるので駄目なんじゃないか」と。「そうだ、そうだろう」「そうかもしれない」そこで一応は治まった。

皆が夢を見ていたのだ。朝目が覚めたら「ボーボー」という汽笛の音が聞こえる。「おーい、港へ着いたぞ、起きろ起きろ」と言う者。「尼港へ着いたん

だ、とうとう着いたぞ」と歓声を上げる者もいる。列車は停まったままで小一日動かない。降りるとも言わない。ハバロフスクの街で停車し、通過したのだ。

そのうち列車が走り出し、西へ大きく回った。一日とまって、思い出してまた走り出す。臨時列車だから致し方ないことだ。どこへ行くのか当てのないまま数日走った。そのうち日本側の指揮者を通じての説明が伝えられた。日本から迎えの帰還船が少なくて直ちに本国へは送れない、当分待ち合わせのための収容所へ行くことになった、というのである。これも真つ赤な嘘であったのだ。夢は既にして夢となったのである。

私達千人はハバロフスクから西へ約百キロのイズベストコーツヤという小駅で降ろされた。後に知ったことだが「イズベスト」とは石灰という意で「石灰の街」である。

ソ連警備兵（以後「カンボーイ」と言う）の命令で「ヴィストラ、ヴィストラ（早く、早く）」とせかさされて全員降車した。元ソ連の政治犯等の重刑の流刑者が入れられていた監獄跡へ分散収容されることになった

のである。イズベストコーワヤから北へ約八百キロの  
コムソモリスク（コムソモールは青年の意、青年の  
街、すなわち若い街）までを三地区に区分し、その第  
一地区にある収容施設へ分散して収容されたのだ。

シベリア本線に近い所から順次付番して、一〇〇分  
所から始まり一〇二分所、一〇三分所というように呼  
称し、そのそれぞれへ事業量に応じて人員を配分した  
わけだ。この地区を統括する地区長はクリドールとい  
う所に所在していた。

後日、私がクリドールへ収容所を移った時、ソ連収  
容所長（ナチャニック）の大尉（カピタン）から聞いた  
ことだが、この八百キロの間に関東軍約八万人を投  
入し、鉄道建設に必要なあらゆる作業に従事させて、  
約三カ年間で完成せしめたのだ。

鉄道建設といっても現今のようなブルドーザー等の  
重機械があるわけはなし、総てが人力による作業に  
よって行われた。鉄道建設にかかわるあらゆる作業と  
は、まず線路となる土台、基盤の土盛り、次には砂礫  
入れから枕木の配置。この枕木は、白樺の原始林の伐

採から始め角材とする製材もする。伐採用の鋸から  
斧、鉞の製造修理に至るまで、各種資材の積載と自動  
車搬送。その積み荷の降ろし作業、我々の居住する住  
居施設、ソ連関係者の官舎にまで及ぶ建設作業一切。  
食糧の生産は冷凍地帯のためできないが、原料加工に  
よる食糧の製造に至るまで、あらゆる作業を課せられ  
たのである。

私はシベリア本線に一番近い第一地区（支部とも  
言った）に収容されたが、復員後に判ったことだが、  
鏡泊湖南湖頭へ移駐し陣地構築に従事していた第一二  
一九部隊本隊は、ソ連軍との戦闘もなく武装解除を受  
けた後、私が収容されていた最奥地の第三地区コムソ  
モリスク近辺へ入っていたということである。

イズベストコーワヤ駅へ降りて見たものは、白一色  
の荒野というか原野であり、白雪の連山であった。降  
車して点呼をする。五列に並ばせて数を読むのである  
が、どうも掛け算ができないらしい。並んでいる横を  
マンドリンを抱えて行ったり来たり五、六回もしただ  
ろうか、やっと数字が出たらしい。寒さの中をしっと

立っているこちらは寒気が身に染みてやりきれない。直ちにラーゲル（収容所）へ行くということで行軍に移る。

五、六キロ歩いては小休止をする。寒冷の中での小休止も辛い。流れていた汗が冷えて寒気が身に迫る。歩くも辛し、休むも辛し、これも虜囚の悲しさか。夜行軍となる夜半に入ると、歩きながら疲れ果てて眠る者が出る。体力の衰えている者は落伍してゆく、落伍しても助けてやる気力も出ない、自分がやっと立っているのだから。今まで阿城から行動を共にしていた清水正光さんも落伍してしまった。雑糞だけは持ってやっていたが駄目だった。しかし、落伍者は後続していたソ連軍の自動車に拾われて翌日、ラーゲルで顔を合わせることができたことは幸いであった。

幾ら歩いたのか判らないが、多分三十キロ近くは歩いたのではなからうか。カンボーイが「とまれ」と言う。前方に鉄条網を巡らし二隅に望楼が建ち、中に二、三棟の平屋の建物が見える。目的のラーゲルへ着いたのだ。一個中隊は二百人の兵数であった。直ちに

朝食の用意にかかれとの日本側中隊本部からの命令である。その朝は各自の携帯する糧秣で食事をとった。シベリア抑留中に食べた最後の米の飯である。これより復員するまで約三年間に一度の米粒も口にすることはなかった。

兵舎となる建物は、長さ六十メートル、幅十五メートルくらいのもので二棟あり、一棟は炊事場らしかった。宿舎の中には三個の鉄製のペーチカが据えてあった。早速各分隊から二人ずつ薪拾いの使役が出された。全面雪に覆われてはいるが、日本の雪と違いザラザラとした乾燥した雪で、その雪もあまり深くは積もってはいない。大体二、三十センチ、吹き溜まりで一メートルくらいである。その中を枯れ木の倒れているものを担いで来るのである。その日は苦勞してペーチカに火を入れて部屋を暖めることが最優先の仕事であった。一旦火がつくと、湿った枯れ木であろうと生木であろうとよく燃えた。ガンガン燃やしたけれど部屋全体はなかなか暖かくならない。それでも外にいるより楽だ。

部屋割りをして、それぞれ装具を降ろしてしばらく小休止する。部屋は下が土間である。そこへ寝ろと言うが、とても無理だ。柵外へ出してもらい、雪の下にある枯れ草を集めて来て幾らか下に敷いて、携帯天幕を持って居る者はこれを枯れ草の上に敷いて、その上

に各自一枚は持っている毛布を敷いた。下敷きにする毛布の持ち主は渋い顔となる。おおむね若い兵隊である。スペースが狭いので三人が一組となる雑魚寝である。そうすれば上掛けが毛布二枚だ。防寒外套は各人が自分の上に掛けて寝るようにする。頭から被らなければとても寒くて眠れない。出入口が三カ所あったが、その近くへ寝る者はなおさらだ。交代で不寝番を立ててペーチカをどんどん燃やさなければならぬ。それでも長旅と大行軍の疲れでいつの間にか睡りに入っていた。肌に寒さを感じて目が覚めたら朝だった。もちろん着の身着のままでのごろ寝であった。とても軍衣袴が脱げるような状態ではなかったのである。

朝目を醒ましても顔を洗う水がない。川が近くにあり

にはあるが鉄条網の外であり、冬期なので結氷しているのだ。どうしても水が必要であれば雪を溶かす以外にない。その雪も湿度が少ないので水になる効率が悪い。洗顔は当分できない。目を擦って済ますこととなる。

強制労働が始まる。今一番必要なのは薪木である。

炊事をするためと暖房用には欠かせないもの。これは強制労働とはあまり感じない。むろん、ソ連側関係者の使う分を含めての作業である。カンポイに連れられて原野や山に入る。ちょっと遠くへ離れるとカンポイがうるさい。適当な太さのものを一本ずつ担いで帰るのだが、横着して細いのを持つと、「ニハラショー」と取り替えを迫る。太い重いのを担いで出ると「ハラショー オーチンハラショー（良いぞ、大変良いぞ）」と褒めてくれる。こうしてロシア語の単語を少しずつ覚えていったのだ。

薪木採りが終わって帰ると食事となる。食事は、主食として黒パン一食分三五〇グラムとされていたが、三〇〇グラムぐらゐあるだろうかと思われる程度の大



きさ。副食としてスープが付いた。スープは、練の塩漬を少量入れて大豆の丸玉を煮たものを飯盒八分目量が二人分である。その大豆量は飯盒の五分目ぐらい入っていた。この大豆が入ッ當時二、三カ月続いた。

大豆は非常に消化が悪く、体力の弱っている者は一番にやられた。一般的には大豆は高蛋白で栄養価が高い食品とされているが、大豆は幾ら指で簡単に潰せるように煮てあっても、胃腸での消化は不可能だと思つた。入ッしての急激な環境の変化と併せて仲間関係も粗悪となり、安眠が得られないこともあり、栄養失調者が続出した。身体全体に黒い小さな染みが無数にできている。その染みを爪で剥がして見ると中からとぐろを巻いた生毛が出て来る。これが栄養失調の所見である。要するに、毛穴から毛が外部へ出ていないことで皮膚呼吸ができなくなり、自然体力の消耗が加速することとなるのであろう。

この栄養失調に拍車をかけたものに虱の被害がある。捕虜になってからも、海林にいた頃は比較的自由で作業も簡単な使役等であったから、洗濯等も夏物で

あり着衣も少なく、直ぐ乾くということもあり、割に小まめに行なっていたが、シベリア送りの輸送列車に乗せられてからは、洗濯しようにも水も場所もなく、十数日同じ着衣で過ごすうち、誰から移ったか、知らず知らず部隊の大半、あるいは全員に虱が寄生する結果となっていた。吸血虫だが、南京虫のように後に痒みが残るでもない。ただ夜半「ゾロゾロ」と身体を這う感触は何とも言えないものだ。この虫は、毛穴へ頭を突っ込んで吸血しており、見つけて取り除こうとすると丸々太った尻だけ千切れる。後に毛穴の中に頭部が残り、そのまま吸血を続けるという誠に厄介な代物だ。

ソ連側と交渉したがソ連には入浴の習慣がなく、設備としては今の「サウナ風呂」と同じ考え方に基づく蒸し風呂があり、修理してそれへ入ることとなった。素っ裸になり汗を流して出て来ると、何かサッパリした感じになった。出た者は順番に裸のまま次の小部屋へ行き「三毛全部（頭、脇、前）」をカミソリで剃られてしまった。これは復員船へ乗るまで続けられた。

この「サウナ風呂」は月一回ないし二回ぐらい、どのラーゲルへ行っても入りました。着衣については、この蒸し風呂同様の施設で、百度以上の高温で殺虫と殺菌のため蒸した上身につけるようになった。

病気の場合のことですが、一週間に一回、中尉の肩章を付けた女医さんが回ってくる。「チェンペラトラ ニエット（熱はないか）」と言う。この言葉も割に早く覚えた。休務を許されるのは三十八度を超えた場合である。

作業は、バラス降ろしの作業、ソ連関係の使役、道路補修工事、伐採作業等があった。道路工事は、凍結した道路上を重量のある土砂運搬をするので、それら車両の安全走行のための補修はなかなか大変であった。伐採作業は、一抱えもあるような白樺の大木を二人引きの鋸で引くのであるが、ノルマが日本人には厳しかった。

作業命令は毎日夕方、ソ連側から日本側の中隊長へ、作業種目とその所要人員が伝えられた。小隊長、分隊長の集合がかかり、明日の各小隊、分隊への作業

割りが行なわれる。分隊長が帰って来て、誰々は何某の指揮で何作業に行くこと、伐採作業は誰以下何人、俺と一緒に、というように伝達される。まだ誰もこれを不思議と思う者はいなかった。

糧秣受領の使役は、作業にいかん疲れ帰っていても希望者が多い。何とか、たとえ少量であろうとも、クスねる機会があればこれをクスねて帰って人知れず食べたい。飢えた人間の生のままの心である。この糧秣受領は毎日のことである。ソ連側は、食料は毎日一日量しか渡さない。これは逃亡を恐れることと思われた。糧秣受領の作業から帰った兵隊が飯盒をベーチカへ載せている。何か獲物があつたのであろう、水を一杯入れて一緒に流し込むのである。古参上等兵も哀れなものだ、過去には多くの新兵のビンタを取つたであらうに、過去の威厳は既がない。

私の部隊は残留隊で六十人ほどで、そのうち同じ中隊の者は十四、五人であった。海林で編成された作業大隊（千人）へは全員入っていたが、所属する中隊が違つたため、このラーゲルへ一緒に入ったのは常盤出

身の清水さん一人になってしまった。二人の親近感は兄弟以上のものとなっていた。清水さんは胸部疾患で阿城陸軍病院へ長期入院中を、病院閉鎖のため行動を共にすることとなったものだが、食糧の粗悪さから体調を崩した上、住環境も悪くだんだん衰弱し、このラーゲル一六へ来て一月ほど後には起きられなくなり、食事もあり食べなくなった。

ある朝すぐ隣に寝ている清水さんが私を揺さぶるのを目覚めると「しくじったあ」と言うので「下」のことと思ひ毛布をハネて見ると、軍衣袴を着たままで寝ているが、着ている軍袴が真紅に濡れている様子。急いで脱がせて見たところ腸からの出血。しかも大量の出血をしているらしい。誰も軍衣袴の着替えは持っていないので、私が着ていた袴下と防寒袴下を着せて毛布を一枚巻いてあげた。私も寒いので袴下を二枚はいて軍袴を着て我慢することにした。清水さんは衰弱して眠りに落ちていらしいので、明日からのこともあり、鮮血に染まった清水さんの着衣を洗濯することにしました。一斗缶へ雪を入れては溶かし、溶かしては雪を

入れして水をつくり、石鹼はないので、ある程度を示すいでみれば水も真紅になるほどの大量出血である。一たん水を捨て、また雪から水にする作業を繰り返して、汚れ物を入れて今度は煮沸した。もう一回雪から水への作業をしてすすいだから、ペーチカのそばへ掛け乾燥させた。

日本側の中隊本部から重患が出たことをソ連側へ告げてもらい、軍医の来診方を願い出してもらった。翌日、ソ連軍の女医さんが来てくれた。私も当日は作業を免除してもらい、清水さんに付き添うことの許可を得た。女医さんは、明日病院へ入院させるよう指示して帰った。私は中隊本部へ行き、同郷、同部隊であるからせひ病院まで付き添いたい旨を申し出たところ、ソ連カンボーイ隊長と交渉し、許可を得てくれた。

翌朝、清水さんを牛の引く轎に載せ、所持品一切を積み込んで、ソ連人轎使いと三人で十キロ余の病院までついて行った。病院に着いてベッドに入れ別れを告げると「世話になったなあ、元気でやれよ」と目に涙を潤ませていた。私はこれで大丈夫であろうかと心

中、哀れさと別離の悲しみを噛み締めた。「病院でしっかり養生して、元気になって故里へ帰ろうよ、内地では近くだから生涯親友になろうよ」と言っただけで別れた。これが清水戦友との今生の別れとなった。十二月も下旬のことだった。

その後、私自身発熱して、翌年二月中旬この病院に入院したが、清水さんに会うことはなかった。

私はかれこれ二カ月ほどこのラーゲルで作業していたが、朝は軍隊時代と同じように点呼をとった。二日か三日に一人ぐらい点呼に立ってない者が出る。だんだんその数が増えて来た。物言わぬ人となってしまったのである。

この一一六分所は土間で寝起きしているので、ペーチカをいくらか燃やしても室内温度は一向に上がらず、おまけに下から湿気が伝わるという極悪の住環境であったことも犠牲者を多く出したのかもしれない。少なくとも三割近い兵士が不帰の客となったのではないだろうか。

### 【執筆者の紹介】

住 所 岡山県総社市

生年月日 大正十二年三月二十五日

軍 歴 昭和十九年一月十九日 現役兵として満

州第一二一九部隊（在）阿城に入隊

昭和二十年八月 ハルビン飛行場におい

て終戦武装解除

昭和二十年十一月 ソ連軍により強制連

行、シベリア イズベストコフワヤ地

区一一六分所に収容

昭和二十一年五月 ラーゲル（一〇九）

分所に移動 同年十月 ラーゲル一〇

四分所へ移動

昭和二十三年六月一日 ナホトカより高

砂丸で舞鶴着、帰還する

（岡山県 森 隆士）